

―原 著―

## 紫の上と明石の君のあはれ

―明石の姫君をめぐり―

### Mono no Aware in Murasakinoue and Akasinokimi in Genji Monogatari

武 藤 美也子

Miyako MUTO

#### 要 旨

源氏物語の本質は「ものあはれ」にあるという。この論文では明石の君が生んだ姫君をめぐる紫の上と明石の君の「あはれ」について論じる。明石の君は姫君の実母であるが自らの手では彼女を育てることはできなかった。紫の上は子に恵まれず、明石の君が生んだ姫君を預けられる。その二人の心情を追うことによって『源氏物語』の「ものあはれ」を考察する。

キーワード ものあはれ 紫の上 明石の君 心の傷

はじめに

『源氏物語』の本意は「ものあはれ」にあると本居宣長は『紫文要領』<sup>(1)</sup>や『源氏物語玉の小櫛』<sup>(2)</sup>の中での確に論評している。

ここでは紫の上と明石の君二人の、姫君をめぐる「あはれ」の世界について論じてみたい。姫君とは明石の君が源氏との間に設けた姫君のことである。

一 源氏の子

主人公源氏は子宝には恵まれなかった。彼の子は三人である。それも公に出来たのは二人だけだった。公に出来た二子は、男子と女子の一人ずつというわけであった。そのただ一人の娘を産んだのが明石の君である。名前から分かるように彼女は織内にも入らない明石という地で育てられた受領の娘であった。

そのような身分違いの地方の受領の娘である明石の君に、作者紫

式部は源氏にとつてたった一人の娘を授けている。源氏に最も愛され他のどの女性より源氏の側近くにいつもいた女性、紫の上には子は与えられなかった。

作者のこの辺りの設定は深いものがある。外から見ればこれ以上ないほどに恵まれていると思われる人にも、それぞれの悩みや哀しさが必ずある。そしてその中で人間は揺れ動く心を持って余し、それでも一生懸命生きていくしかない。それを作者は書こうとしていたのではないか。先に述べた本居宣長が言う「ものあはれ」である。

その後この二人は、源氏の一人娘、明石の君が産んだ姫君を中心に据えて「あはれ」な関係を結ぶことになる。この論文ではそのことについて述べていきたい。

## 二 源氏の思惑

源氏は明石の君に姫君が生まれたことを知ると、この子がゆくゆくは皇后になるべき娘であると確信する。それは宿曜に「御子三人、帝、后必ず並びて生まれたまふべし。中の劣りは、太政大臣にて位を極むべし」(薄標二七五頁)と出ていたからである。そこから源氏の画策が始まる。

この姫君を入内させ、行く行くは皇后とするには、彼女の環境を変えることが必要であった。それは当時の皇室婚においては、父親の後見が重要視されており、世間に認められるためには、入内する娘は父親の本邸で育った正妻の所生子が望ましかった<sup>(3)</sup>。この時源氏の正妻葵上は亡くなり、今は紫の上が実際上の正妻の地位におり、

源氏と共に二条院に住んでいる。だが残念なことにその紫の上には子供が生まれぬ。源氏はしばしば「さこそあなれ。あやしうねぢけたるわざなりや。さもおはせなむと思ふあたりには心もとなくて、思ひの外に口惜しくなん」(薄標二八一頁)と言う意味のことを紫の上にいう。宿曜によれば源氏には子は三人で、女子は一人である。今後も紫の上には子は生まれず、明石の君の産んだ姫君がただ一人の後となる子ということである。

そこで源氏は明石の君の姫君を二条院に引き取り、紫の上の養女として育てようとする。それを実現させるには明石の君と紫の上、二人の女性の了解が必要であった。ここに姫君をめぐる二人の「あはれ」の物語が始まる。

## 三 姫君をめぐる二人の「あはれ」

源氏はまず明石の君を京に迎えようと二条東院の築造を急ぐ。しかし「身のほど」を知る明石の君は二条東院に入ることはおろか、京に出てこようともしない。そこで父である明石の入道は大井河畔にある親類筋の旧邸を修理させ大堰邸とし、そこに明石の君たちを移そうと考える。ようやく明石の君は母である尼君と共に、姫君を連れて京の西の端の大堰邸に移ってくる。

源氏は明石の君の二条東院への移転拒絶の意味が分からず、しきりに姫君と共に東院への移りを促す。明石の君の固い拒絶の前に、源氏はいよいよ次のように言う。「さらばこの若君を。かくてのみは使なきことなり。思ふ心あればかたじけなし」(薄雲四一七頁)と袴着

の儀にかこつけて、若君<sup>II</sup>姫君だけでも自分の元に置くように提案する。明石の君は「いとど胸つぶれぬ」のであった。

(一) 明石の君のあはれ

自分の子供を手放すことは、母親にとってどれほど耐えがたいことであるか。故郷の明石から単身大堰に出てきて、ようやく源氏と再び会うことができるようになった。といっても紫の上の手前、なかなか訪ねることのできない源氏である。このように源氏のお越しもままならぬ明石の君にとって、源氏との一粒種のこの姫君は唯一の源氏との繋がりであり、それ以上に心の支えであった。もしこの娘が自分の手元からいなくなれば、源氏の君ももう尋ねて来てくれないかも知れない。源氏との縁も切れ娘も取り上げられ、明石の君としてはいかに生きていけばよいのか。

子を手放す悲しき、手放してしまえば恋人源氏も遠のいてしまうかも知れない不安と、この二つを明石の君は耐えなければならぬ。その反面「身のほど」を知る彼女が大堰まで出てきたのは、この姫君を「かかる所に生ひ出で、数まへられたまはざらむも、いとあはれなれば」(松風三八八頁)と明石で育てて朽ち果てさせてはならぬと考へ、やはり源氏の力を頼らざるを得ないと思つてのことである。母として、女(恋人)として彼女の心は千々に乱れるしかなかつた。

それを論じたのが母である尼君である。

尼君、思ひやり深き人にて、

「あぢきなし。見たてまつらざらむことはいと胸痛かりぬべ

けれど、つひにこの御ためよかるべからんことをこそ思はめ。浅く思つてのたまふことにはあらじ。ただうち頼みきこえて、渡したてまつりたまひてよ。母方からこそ、帝の御子もきはぎはにおはすめれ。この大臣の君の、世に二つなき御ありさまながら世に仕へたまふは、故大納言の、今一階なり劣りたまひて、更衣腹と言はれたまひしけぢめにこそはおはすめれ」(薄雲四一九頁)

尼君はまず姫君のことを第一に考えなさいという。母の個人的な悲しみに振り回されてはならない。前述の通り娘が世間から重く扱われるためには、正妻の所生子で、父親の本邸で育つことが望ましかった。この姫君はその点からは確実に不利な立場にある。源氏を信じて紫の上の養女にしてもらい、源氏の側で養育してもらうことが姫君の幸せであると論ず。この姫君はこのまま大堰邸で育てられなければならない、明確に不利な立場のままである。当時の皇室婚のことをわきまえていた尼君は、情に流される母親の気持ち<sup>(1)</sup>を承知した上で、ここでは論理的に娘を論じている。

母親にこのように理を立てて論じられることにより、明石の君はこの姫君の行く末のために養女に出すことを決心する。ここで重要なのは、明石の君は母君のいうことは、毛頭承知の上で、頭では分かっている。しかし心は納得しないということである。宣長がいうように心は心で動いて行つてしまふ<sup>(2)</sup>。それにも拘わらずわきまえに従おうと決心する明石の君は「あはれ」というより他にない。

## (二) 子との別れ

源氏からの迎えが来て、いよいよ姫君との別れの場面である。

この春より生ほす御髪、尼そぎのほどにてゆらゆらとめでたく、つらつき、まみのかをれるほどなど、いへばさらなり。よそのものに思ひやらむほどの心の闇、推しはかりたまふにいと心苦しければ、うち返しのたまひ明かす。「何か。かく口惜しき身のほどならずだにもてなしたまはば」と聞こゆるものから、念じあへずうち泣くけはひあはれなり。姫君は、何心もなく、御車に乗らむことを急ぎたまふ。寄せたる所に、母君みづから抱きて出でたまへり。片言の、声はいとうつくしうて、袖をとらへて、乗りたまへと引くも、いみじうおぼえて(薄雲四二八頁)

この場面は、明石の君の暗澹たる心が痛いほどに分かる描写である。季節は一二月、灰色の空から雪の降り続く暗い季節。母である明石の君はこれが一生の別れと思えるほどの悲しさの中にいるので、自ら姫君を抱いて縁側の端まで出ていらっしる。この時代の高貴な女性には絶対にこのような端近い所に出てきて、人に顔を見せたりするものではない。まして「身のほど」を知り自分を厳しく自己制御する明石の君であれば、これは異例である。これによっても明石の君がいかにほどの悲しさの中にいるかが分かる。我が子であっても今度何時会えるか分からない彼女にとって、まさに今生の別れと思えるものであった。現実にはこの後八年間二人は会うことはないのである。

一方何も知らない幼い姫君、三歳前くらいである。その子が母の袖を引っ張って「乗りたまへ」という情景描写がある。子供は母と一緒に行くものと思っている。母と無邪気な姫君の様子とを対比させることによって、明石の君の悲しみの心を浮き出させている。

源氏もこの光景には心打たれるものがあり「道すがら、とまりつる人の心苦しさを、いかに。罪や得らむと思す」と書かれている。

明石の君は姫君を手放してからも「大堰には、尽きせず恋しきにも、身のおこたりを嘆きそへたり」(薄雲四二二八頁)とあるように、姫君のためと割り切ったつもりであったが、やはり子供を手放したことは自分の間違いであったのではないかと、涙に暮れるのであった。それが人の心の「あはれ」である。

## (三) 紫の上のあはれ

一方紫の上の場合はどうであったか。

「落標」の巻で、紫の上は源氏から明石の君との間に子ができたことを知らされる。

女君には、言にあらはしてをさをさ聞こえたまはぬを、聞きあはせたまふこともこそ思して、「さこそあなれ。あやしうねぢけたるわざなりや。さもおはせなむと思ふあたりには心もとなくて、思ひの外に口惜しくなん。女にてあなれば、いとこそものしけれ。」(落標二八一頁)

これを聞いた紫の上は嫉妬するわけであるが、それは「さまよき嫉妬」<sup>(6)</sup> 枠内の嫉妬であった。ここで源氏は前述の通り「あなたに子

どもが産まれれば良いのだが、そうもいかず明石にできてしまいましたが。それも女ですからつまらないですね」という。しかし源氏の胸中には女子でつまらないというどころか、前述したように大いなる野心があった。<sup>(7)</sup>

ここでは紫の上は須磨流謫の時の自分の寂しさ悲しさを思い出し、源氏も同じ気持ちであり、明石の君のことは寂しさを紛らわす「すさびにこそあれ」と自分に納得させようとするのである。ただその時に「あなたには子ができない」といわれるのは女性にとってはきつい言葉である。

その後明石の君が大堰に居を移し、源氏は明石以来はじめて明石の君と再会を果たし、ようやく姫君とも対面した。「若君を見たまふも、いかが浅く思されん。…うち笑みたる顔の何心なきが、愛敬づきにはひたるを、いみじうらうたしと思す」(松風四〇〇頁)のであった。そして姫君の行く末に思いを巡らせ、前述した通り姫君を紫の上の養女にする計画を実行に移すべきであると確信する。それには紫の上の承諾をとる必要があった。

大堰からの帰りが長引いたことで紫の上の機嫌が悪い。それを取り繕うように宿直を切り上げて紫の上の元に帰ってくる。そして紫の上は姫君を引き取ることの相談を持ちかける。「めざましと思さずはひき結ひたまへかし」(松風四一三頁)と袴着の腰結の役をしてくれるように頼む。<sup>(8)</sup>これは紫の上の養女として育ててくれということである。それに対して「いとよやかなひぬべくなん。いかにうつくしきほどに」といって、すこし微笑んで源氏の申し出を受け入れる。

その理由として「児をわりなうらうたきものにしたまふ御心なれば」とあるが、実際の紫の上の心中はそれだけではなかっただろう。

この姫君は源氏が須磨に流され、明石に流れ着いた時に知り合った明石の君との間にできた子である。その源氏が都を離れていた間、紫の上は死ぬような寂しさをこらえて、源氏の二条の院を守り抜き彼の帰りをひたすら待ち続けていた。源氏も同じ思いで耐え抜いてくれたと思っていたが、受領階級の女性と付き合ひ、子供まで出来る仲になっていた。紫の上の気持は悲しいというか、情けないというかうちひしがれるようなショックを受けるものだっただろう。その子供を引き取ってくれないかというのだ。

紫の上との仲の修復を願う源氏の気持ちを汲み取り、また嫉妬深い女と思われたくない気持ちと、自分には子供ができない負い目とが、紫の上を姫君養育に踏み出させた。この辺りにも他の女君とは違い源氏との関係においてのみ彼女の地位があったということが関係してはいないか。<sup>(9)</sup>拒否することのできない境遇にある紫の上を取って「あはれ」である。

このような複雑な思いの紫の上のもとにやってきた姫君は、ときどきは母君達を求めて泣くことはあったが、「上にいとよくつき睦びきこえたまへれば、いみじううつくしきもの得たりと思しけり」(薄雲四二六頁)とあるように紫の上に良くなつく素直な可愛い子供であった。源氏が明石の君の元に出かける時も、今までは嫉妬の気持ちが起こり気分が悪くなるのであったが、「今はことに怨じきこえたまはず、うつくしき人に罪ゆるしきこえたまへり」ということで、こ

の姫君により源氏の行為も許すことができる。それ程この姫君は紫の上に良くなつき、彼女もこの姫君を愛おしみ、姫君によって慰められた。このように紫の上にとってこの姫君はかけがえないものになっていく。

源氏が明石の君の元に向こうと準備をして、その美しく着飾っている源氏を目の前に見るのは紫の上としては苦しく辛いことであつたが、姫君を得た彼女は今までとは違ふ。

何ごととも聞き分かで戯れ歩きたまふ人を、上はうつくしと見たまへば、をちかた人のめざましきもこよなく思しゆるるされにたり。いかに思ひおこすらむ。我にていみじう恋しかりぬべきさまを、とうちまもりつつ、ふところに入れて、うつくしげなる御乳をくくめたまひつつ戯れるたまへる御さま、見どころ多かり。(薄雲四一九頁)

ここでは、紫の上は子供を得た嬉しさをひしひしと感じている。その一方で彼女は子供を解放した明石の君の悲しみをも思ひやることができるのである。ただ出ることのない乳首を含ませるといふ動作は、単に子が可愛いという以上に子のない女性の切なさを感じさせる。

子を生むことはできなかった紫の上ではあるが、姫君を育てることによって母としての思いを得し、今までは恋敵として嫉妬の対象であった明石の君の存在を許せるようになった。子の可愛さを身につまされることにより、子を解放して自分に預けてくれた明石の君の並々ならぬ悲しみを感ずることができ、子を生むことの出来

なかつた紫の上。子は授かつたが自分の手元で育てることが許されなかつた明石の君。紫の上は明石の君に、女性としての気持ちの繋がりを感じたのではないか。これは源氏をめぐる女として、自分たちではどうすることもできない「あはれ」の世界である。

本来なら源氏にこよなく愛され大切にされ、子まで自分の手元に取り上げることのできた紫の上は、完全なる勝者のようである。だが紫の上自身には決してそのようには思えない。どちらが勝者というものではない。この時代に生きる女性の悲しさということでも明石の君も同じだと思ふのである。

このとき紫の上二四歳である。北山で雀を逃がされて泣いていたあどけない一〇歳の可愛い少女は、一四年の時を経て、源氏が最も大切にかしづいている、人も羨む女性としての地位を確保していた。しかしあの天真爛漫な一〇歳の少女は少しずつ世の中の「あはれ」を、特に最も信賴していた源氏によって、女の「あはれ」を感じさせられていく。<sup>(10)</sup>紫の上を核に据えて『源氏物語』はこれから後、ますます人間の心の深奥に迫り、「あはれ」の世界を深めていく。

#### 四 その後の二人

明石の君の娘、明石の姫君は一一歳となり皇太子妃として入内する。それを機に八年ぶりに実母である明石の君は、姫君との対面が叶う。それ以後明石の君は姫君の後見役として娘の側に仕えることができるようになる。その後明石の姫君は男宮を出産。明石の君は確固とした地位を得、皇太子妃、ゆくゆくは国母の母として人々か

らも尊敬の念をもたれ、幸せな日々を過ごすこととなる。<sup>(11)</sup>

一方紫の上は、源氏が親子ほども年の違う女三の宮を妻として迎えることにより、心は深く傷つき、その心の傷は彼女の体をも蝕むこととなる。かつての須磨流謫の時に彼女は死ぬほどの寂しさを一心にこらえて源氏の帰りを待っていた。源氏も同じ思いであると思っていたが、そうではなかった。それは最初のほんの小さな源氏に対する疑念であった。しかしそれは源氏によって癒されるのではなくますます大きくなっていき、ついに二六歳も年下の女三の宮との結婚という事態で決定的となる。

二二年間共に過ごし、源氏も四〇歳となり、後は二人でゆっくり過ごしていけると思っていた矢先に、親子ほども年の違う女三の宮(藤壺の異母妹)と結婚するという。これは彼女に決定的な痛手を負わせ、徐々に彼女の命を蝕んでいく。

この女三の宮の降嫁の後も、世間的には紫の上の勢いは悠に女三の宮を凌駕していた。<sup>(12)</sup> 誰しもが紫の上は栄華を極めていると見えるその中で、彼女は出家を源氏に願ひ出ている。それは姫君の第一皇子出産と明石の君の実母としての存在を見ることにより、自分の姫君に対する役割は終わったと感じたのであろう。そして源氏は女三の宮降嫁の後でも「君の御身には、かの一ふしの別れより、あなたこなた、もの思ひとて心乱りたまふばかりのことあらじとんん思ふ」(若菜下一九八頁)という。「かの一ふしの別れ」とは、源氏須磨流謫の時の離ればなれの生活のことである。その時の源氏は明石の君と通じて子までなしていたのである。そして女三の宮との結婚、そ

れほどのことをしておきながら「あなたには何の気苦労もなかった」

というのである。この源氏の無神経さに堪えきれなくなると共に、自分の存在のはかなさを思い知らされる。それらを受けて口に出した出家の願ひであったが、それは源氏には通じなかった。

源氏によって育てられた一人の女性はその源氏によって世の中の「あはれ」を突きつけられ、そこで命尽きていくのである。この紫の上の心の痛みは男の源氏には分からない。

作者紫式部は、この時代の女の悲しみを書くこととしたのである。

#### 終わりに

紫の上と明石の君の「その後の二人」もそのまま、まさに「あはれ」の世界といえる。姫君の中に「あはれ」を分かち合った二人は、正反対の方向に落ち着くのである。ただ紫の上を実の母のように大切に思い慕ってくれた姫君と、複雑な思いはあるが最愛の源氏に見取られたことが、幸せだったといえるかも知れない。

今回は明石の姫君を中にしての、紫の上と明石の君との「あはれ」について考察を行った。

『源氏物語』本文の引用は、日本古典文学全集『源氏物語』一―五』(小学館)に拠る。

#### 注

(1)「物の哀れを知るといふは、このことなり。その哀れを知らさむため『源氏物語』なり。」「紫文要領」(『本居宣長全集第四卷』筑摩書房)

昭和四四年) 二一頁

「およそこの物語五十四帖は、「物の哀れを知る」といふ一言にて尽きぬべし」「紫文要領」(『本居宣長全集第四卷』 筑摩書房 昭和四四年) 五七頁

(2) 「かくて此物語は、よの中の物のあはれのかぎりを、書あつめて、よむ人を、深く感ぜしめむと作れる物なるに」「源氏物語玉の小櫛」(『本居宣長全集第四卷』 筑摩書房 昭和四四年) 一一五頁

(3) 「一条郎の中宮定子の例を受けて」「このように、当時の皇室婚においては、父親の後見が重要視されるので、世間に認められるためにも、入内する娘は父親の本邸で育った正妻の所生子が望ましいに違いない。というのは、当時は正妻以外の妻は夫と別居しているので、共同意識が薄く、夫婦の結びつきが弱いのである。父親と離れて母親に育てられた副妻の子供と父親のもとで育てられた正妻の子供とは、父親の後見を重視する世間の目もおのずから違ってくるのである。正妻の所生の女子が父親の本邸で育てられることは、父親の後見が篤い、即ち『親にかしづかれて』ということになり、世間も重く見る。父親も対世間的な意味においても入内をさせるなら正妻腹の女子を優先的に考えるのである。」 胡潔著『平安貴族の婚姻慣習と源氏物語』(風間書房 二〇〇一年) 三七六頁

(4) 「姫君に栄達の道を選ばせた母は、同時に娘に血が滲むような忍従と卑下の人生をも選ばせたということになる」 鈴木裕子著『源氏物語』を〈母と子〉から読み解く(角川叢書三〇 平成一七年) 六九頁

(5) 「かなしき事うきこと、恋しきことなど、すべて心に思ふにかなはぬすぢには、感ずることよなく深きわざなるが故に、しか深き方をとりわきても、あはれといへるなり」「源氏物語玉の小櫛」(『本居宣長全集第四卷』 筑摩書房 昭和四四年) 二〇二頁

(6) 「さまよき嫉妬の美德が勧められていた。これによって男の愛情もまさるといふ。紫の上の嫉妬はこの規準にかなうものであるといつてよいのである」『源氏物語二』(日本古典文学全集一三 阿部秋生他校注 一九七二年) 二八三頁頭注

(7) 「今、女子誕生と聞いてからは、源氏の心の中で、明石の君の占める比重は急に大きくなって来た。それは、摂関政治体制における后がねとしての姫君の重さに正比例するものであった。」阿部秋生著『源氏物語研究序説』(東京大学出版会一九五九年) 七九三頁

(8) 「袴の腰を結ぶ役は、着袴親といって重んじられ、親族中の尊長者が選ばれてつとめた」『源氏物語二』(日本古典文学全集一三 阿部秋生他校注 一九七二年) 四一三頁頭注二三

(9) 「後見のない結婚、子を産まない妻、源氏の愛情のみに支えられた結婚生活：他の誰とも違う独自の人生を歩み通した」鈴木裕子著『源氏物語』を〈母と子〉から読み解く(角川叢書三〇 平成一七年) 一三〇頁

(10) 「こうして紫上にもうっすらと女の宿命の暗い影がさすようになるのである。紫上は、しかし、この巻(朝顔)あたり以後から、これに類する幾多の試練によってかえって人間的に成長し、真の価値ある女性としての姿を明らかにしてゆくようになる」横井博著『対訳源氏物語』(笠間書院昭和四三年) 一一五頁

(11) 「わが宿世はいとたけくぞおぼえたまひける。…今は、うらめしきふしもなし」(若菜上二二四頁)

(12) 「対の上の御勢にはえまさりたまはず」(若菜上一五八頁)